

Ⅱ 平城京右京の調査

1 右京一条二坊二坪の調査（第 131－2 次）

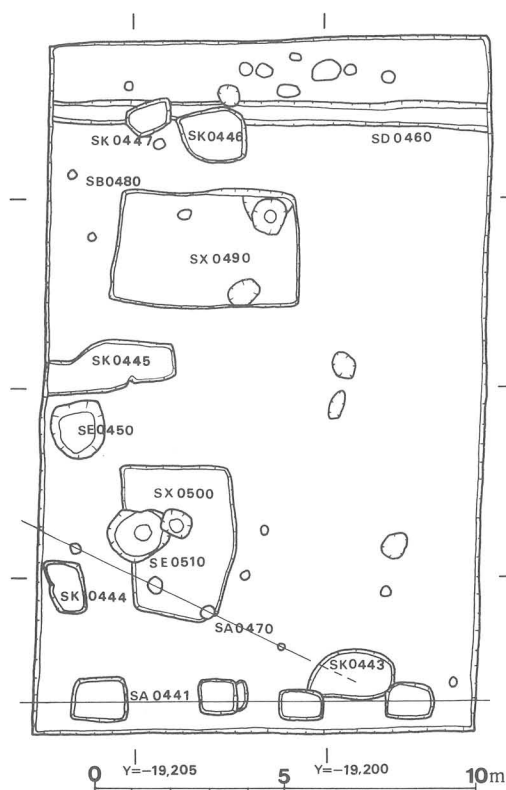
駐車場造成にともなう事前調査である。本調査区周辺では、駐車場の造成にともなう事前調査を数度にわたって行っている。その結果、北側では一条二坊一坪と二坪との坪境小路（昭和52年度、第 103－7 次調査）、西側では掘立柱建物数棟、二坪と七坪との坪境小路（昭和53年度、第 112－8 次調査）、東側では西一坊大路西側溝、二坪東辺部の築地痕跡（昭和54年度、第 118－29 次調査）を検出している。

今回の調査では、奈良時代の掘立柱塀・溝・土壇、古墳時代の掘立柱建物・塀・井戸、弥生時代の竪穴住居・井戸などを検出した。以下、順次解説を加える。

奈良時代の遺構 掘立柱塀 SA 0441、東西溝 SD 0460、土壇 SK 0443・0444・0445・0446・0447 などがある。SA 0441は調査区南端にある掘立柱塀で、3 間分を検出した。柱間寸法は 2.5 m～3.0 m と不ぞろいである。SA 0441は、第 112－8 次調査で検出した掘立柱建物 SB 01の南側柱筋の延長上にあたる。また、両者の距離は約10 mと近接し、塀 SA 0441は SB 01に伴うものと考えられる。東西溝 SD 0460は幅 0.8 m、深さ 0.15 mの浅い溝である。SA 0441と SD 0460との距離は約15 mある。土壇はいずれも浅く、深さ 0.2 m程度である。

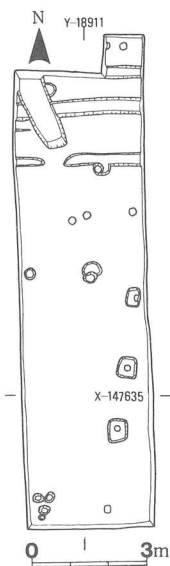
古墳時代の遺構 掘立柱塀 SA 0470、掘立柱建物 SB 0480、井戸 SE 0450などがある。SA 0470は柱間寸法 1.8～2.5 mで 3 間分を検出した。東南方向は奈良時代の掘立柱掘形や土壇によって消滅している。柱穴は直径 0.3～0.4 mである。SB 0480は桁行・梁行とも 1 間（2.4×1.8 m）の掘立柱建物である。柱穴の直径は 0.2～0.3 mである。SE 0450は上縁径 1.5 m、底部径 0.9 m、深さ 0.75 mの井戸である。杵を抜き取った痕跡が認められないので、素掘りと思われる。出土した土器から、5 世紀前半の井戸と考えられる。

弥生時代の遺構 井戸 SE 0516、竪穴住居跡 SX 0500・SX 0490がある。S E 0510 は上縁径 1.5 m、底部径 0.4 m、深さ 1.1 mの摺鉢状の井戸である。杵



第26図 第131-2次調査遺構図

を設けた痕跡はない。埋土中から第Ⅲ様式の壺が出土した。SX 0500は南北に長い長方形の竖穴で、長辺4 m、短辺2.8 m、深さ0.2 mである。中央やや北寄りに、上縁で0.8×0.7 mの長方形、下部で直径約0.4 m、深さ0.5 mの土壌がある。SX 0490は東西に長い長方形の竖穴で、長辺4.6 m、短辺3.1 m、深さ0.2 mである。東北隅に直径約1 m、深さ約0.6 mの土壌がある。SE 0510の掘鑿はSX 0500廃絶後なので、この竖穴は弥生時代中期以前のものである。



第25図
第131-28次
調査遺構図

2 右京六条一坊九坪の調査（第131-28次）

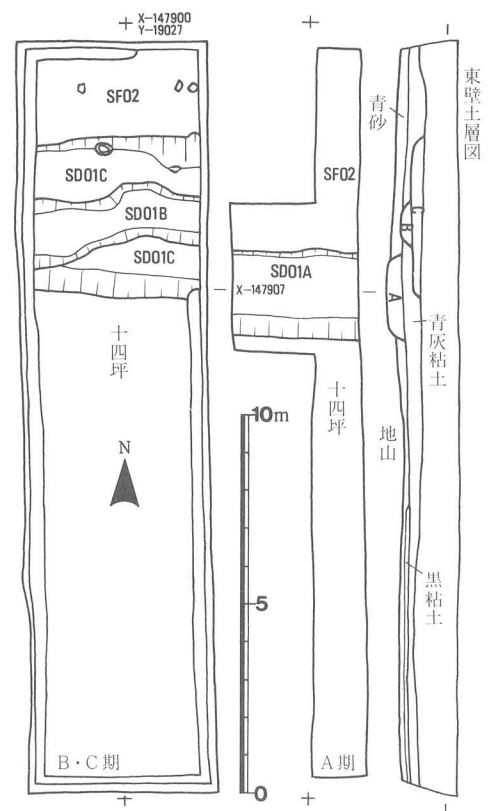
調査地は奈良市六条町236-2、238-2、県道大和郡山斑鳩線から東へ約200 m入ったところで、住宅建設にともなう事前調査である。当該地は右京六条一坊九坪の北端にあたり、敷地北側は五条大路に南接し、大路南側溝の存在が予想された。調査は開発予定地の西寄りに東西3.5 m、南北12 mのトレンチを設けて実施し、トレンチ北部で幅狭い3条の東西溝を検出した。南端のものは中世瓦器を含み、他は遺物がない。この範囲では大路南側溝が見当たらないため、トレンチ北東隅を北へさらに1 m拡張したが側溝は確認できなかった。トレンチ南半では、基準方位より北で若干東へ振れた南北方向に並んだ小柱穴3ヶを検出したが、建物の方位や規模については不明である。

3 右京六条一坊十四坪の調査（第131－9次）

奈良市西の京町104－3においておこなった駐車場造成にともなう事前調査である。調査地は平城京右京六条一坊十四坪の北辺にあたり、遺存地割から六条々間路南側溝の存在が予想された。

検出した主な遺構は、六条々間路南側溝SD 01と六条々間路SF 02である。十四坪内ではなんらの遺構も検出できなかった。条間路SF 02には、後世の削平のためか、舗装等は認められない。南側溝SD 01は3時期（A・B・C期）にわたって存廃を繰り返した。SD 01A：表土下約1 mの青色砂質土面で検出したもので、幅2.5 m、深さ0.5 mほどの素掘り溝である。溝内に堆積した灰色砂には奈良時代の遺物のみが含まれていた。SD 01B：Aより1 mほど北に、新たに掘削される。幅1.4～1.8 mで、やや曲折がある。溝底部で黑色土器が出土した。SD 01C：Bと同位置だが、南北に拡幅し、幅3.8～4.2 mとなる。深さは約0.4 m。わずかながら瓦器片を含む。SD 01Cは青灰色粘質土を掘り込むが、青灰色粘質土の上位に堆積する暗青灰色砂質土も瓦器片を包含しており、六条々間路南側が廃絶した時期を物語っている。

出土遺物には瓦類と土器類があり、主としてSD 01から出土した。瓦には軒丸瓦6291型式1点、軒平瓦6641 C型式1点、平安時代の軒丸瓦1点のほか、平箱5杯分の丸・平瓦片がある。土器類としては須恵器・土師器片が多く、合計平箱4杯、ほかに少量の黑色土器・瓦器片があり、緑釉碗、青・白磁片および製塩土器片が各1点出土している。



第27図 第131－9次調査遺構図

4 右京六条三坊四坪の調査（第131－7次）

調査地は薬師寺の西、奈良市六条町字西波464－1にあり、平城京の条坊では右京六条三坊四坪にあたる。本調査は南都銀行西ノ京支店建設の事前調査として実施した。文献上では右京六条三坊には、大初位赤染大岡・従七位上尋来津首丹足・国百島・茨田連典主らが居住しており、また西二坊大路を挟んで薬師寺に隣接した場所であることから、いかなる奈良時代遺構があるか興味がもたれた。

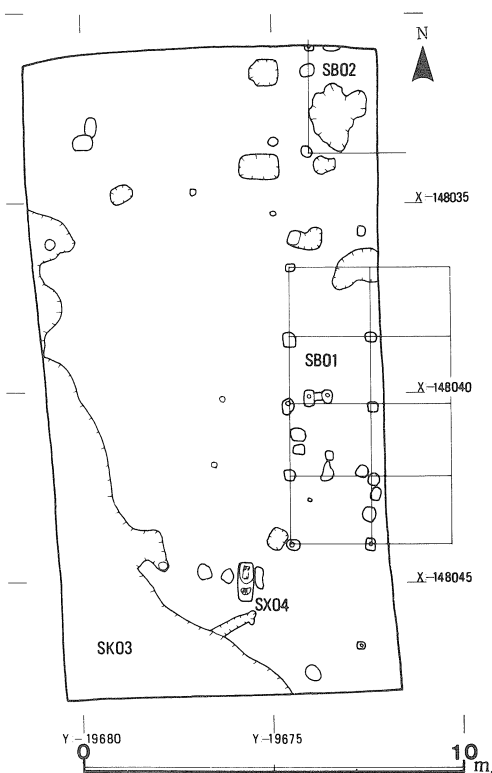
調査地の現状は、旧水田面の上に約1mの整地土があって、表面はコンクリートの三和面となっていた。層位は、1 整地土、2 旧耕土、3 床土、4 土器・瓦片まじり暗灰色粘土層、5 灰白色砂岩質土層である。この第5層は西ノ京丘陵の基層の一部である。検出した遺構は掘立柱建物2棟、土壇、方形掘形などで、すべて第5層上面で検出した。掘立柱建物SB01は桁行4間梁間2間以上の南北棟、総柱建物である。発掘区の関係から東側は未検出である。柱間は桁行が1.8m（6

尺）等間、梁間2.1m（7尺）である。柱掘形は一辺が0.3～0.4mと小さく、西側柱南3からは瓦器が出土した。中世の倉庫遺構であろう。

掘立柱建物SB02は、SB01の北3mにある。SB01と主軸方位が一致することから建物としたが、塀の可能性もある。柱間は2.1m（7尺）。北側の掘形から瓦器片・瓦片が出土した。

SK03は発掘区西南隅付近の不整形土壇である。底には凹凸があり、埋土に瓦器片・瓦片を含む。

以上、当初の予想に反して奈良時代の遺構はすでになく、検出遺構はすべて中世に属するものであった。



第28図 第131－7次調査遺構図

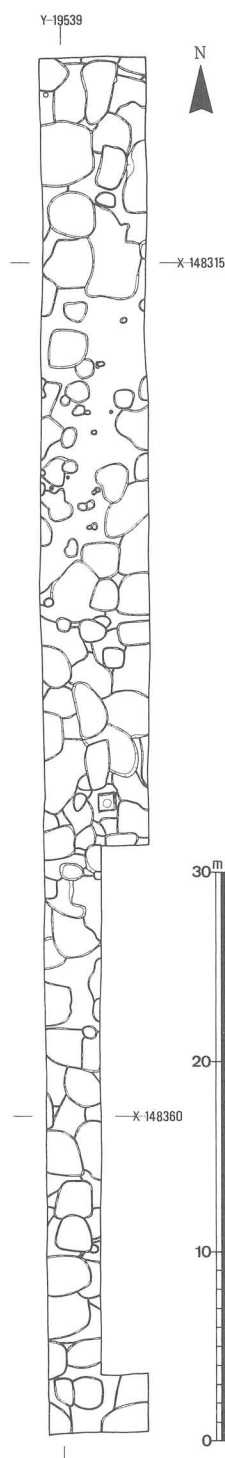
5 平城京右京七条二坊十五坪の調査（第 135 次）

薬師寺が、駐車場の西側、近鉄線のすぐ東側に計画した休憩所予定地の調査である。調査地は十五坪の東北部分にあたり、東西 6 m（南半は 3 m）、南北 74 m の調査区を設けた。今回調査区のすぐ北東部と、南東の七条条間路と坊間小路・坊間路との交差点位置とは、第 124 次（薬師寺駐車場予定地）として調査を行なっている。

検出した遺構は、中世井戸 1 の他、多数の中世土壌で、奈良時代の遺構は中世遺構によってこわされ、検出できなかった。堆積土は水田耕土・床土下に北半では遺物包含層の灰褐色土（厚さ 10～20 cm）がある。灰褐色土下は自然堆積土である青灰色砂質土で、この上面が遺構検出面である。しかし、北半で一部分青灰色砂質土が残るものの、南半ではほぼ全面にわたって土壌が重複した状況であった。

調査区ほぼ中央の井戸は一辺約 80 cm の方形・縦板組で、底中央に、径 40 cm の曲物を深さ 30 cm 程埋め込んでいた。検出面から底面まで約 1 m である。井戸枠のまわりは井戸より後の土壌が重複しているが、一部残る掘形から、約 2 m の円形掘形を推定できる。掘形・井戸埋土からは土師器・瓦器・磁器が出土し、これらは 12 世紀に属する。

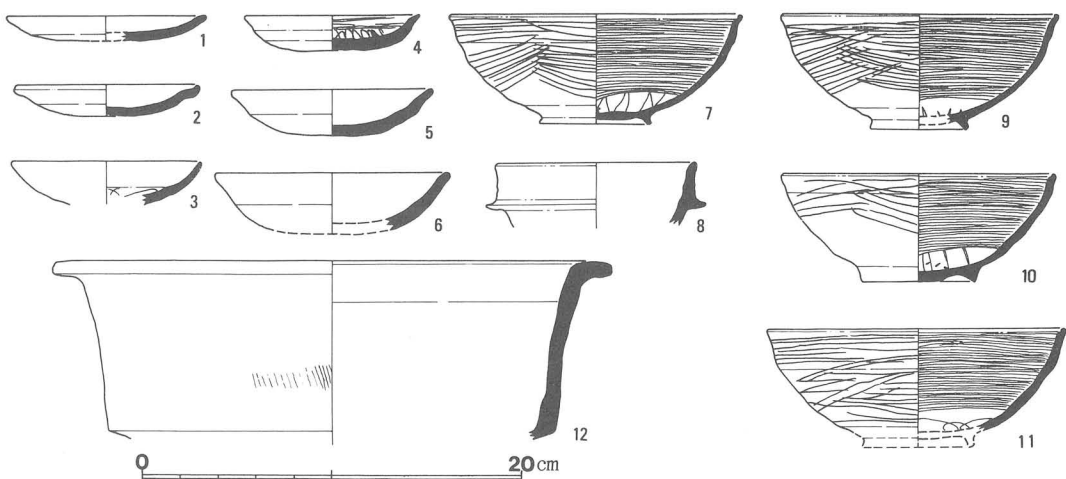
土壌は今回の調査で 100 以上検出し、特に南半に集中している。形状は不整円形が多く、4 m 以上のものから 1 m 以下の円形をなすものもある。調査区北側の青灰色砂質土がよく残るところでは比較的小さいものがみられ、北端部・南半は長大なものが重複する。深さは北半で 50 cm 前後であるが、南端では約 1 m となる。土壌が掘り下げられた底面はほぼ平らで、いずれも青灰色粘土上面である。中には黒色粘土が一部



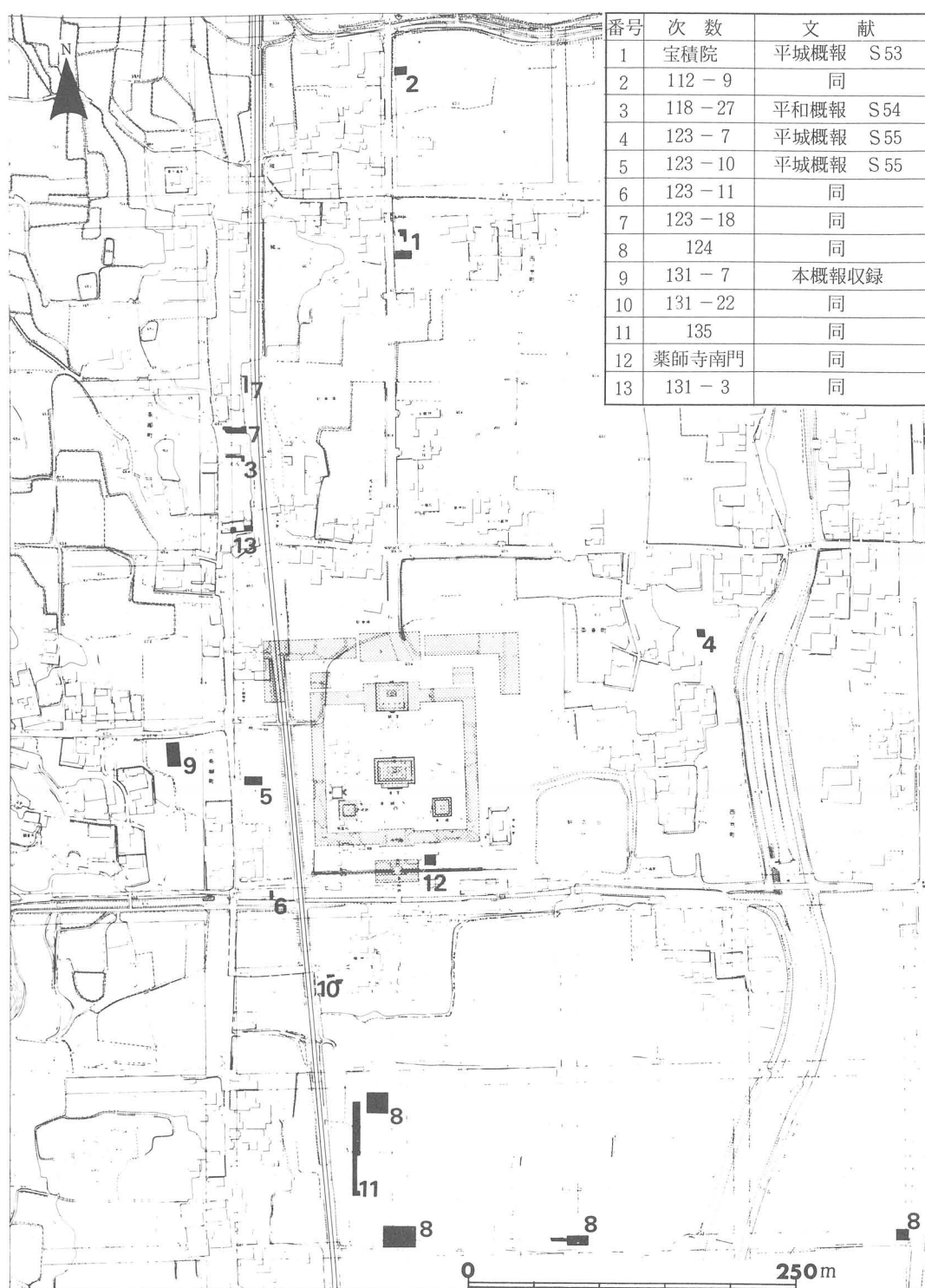
第29図 第 135 次
調査遺構図

分うすく残るものもある。この調査区一帯の自然堆積土は、青灰色砂質土下に厚さ10cm前後の灰色粘質土・15～20cmの黒色粘土があり、その下に青灰色粘土が厚く堆積する。土壌の深さが北と南とで異なるのは、青灰色砂質土の厚さが北側で約15cmであるのに対し、南側で30～50cmと厚いことによるものである。このことから、多数の土壌は黒色粘土採取のための穴であることが推定できる。黒色粘土の厚さは北側で15cm前後・南端で20cmをこえる。南側に黒色粘土が若干厚くなっていることが、土壌が集中することと関連するのかもしれない。今回調査区の南20mの条間路・坊間小路交差点地域の調査（第124次調査）でも、同様な土壌群を検出している。土壌の埋土は砂質土に粘土塊を混えたもので、土師器・瓦器・磁器が少量出土した。これらは井戸出土土器とほとんど時期差がなく、12世紀代に属する。第124次調査出土の土器類も同様の時期である。

今回の調査では奈良時代の遺構は検出できなかったが、中世の土取り穴と思われる土壌を多数検出した。同様な土壌は西市跡（第123～23次）、右京四条一坊十五坪（『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和55年度』）などにみられ、秋篠川周辺一帯に分布するらしい。ただ、西市・四条一坊例の出土土器は13世紀で、薬師寺周辺とは時期が異なる。今後の調査で、粘土採取の実体を明らかにする必要がある。なお、黒色粘土による瓦製作実験を試みたところ良好な結果を得た。



第30図 第135次調査 井戸出土土器（1・2・5・6；土師器、4・7～12；瓦器、3；白磁）



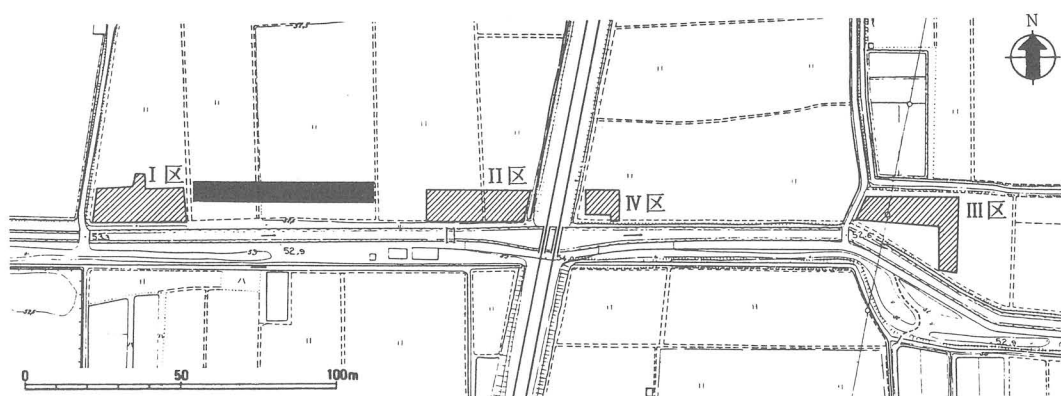
第31図 薬師寺周辺発掘調査位置一覧

6 右京九条一坊十二坪の調査（第125次補足）

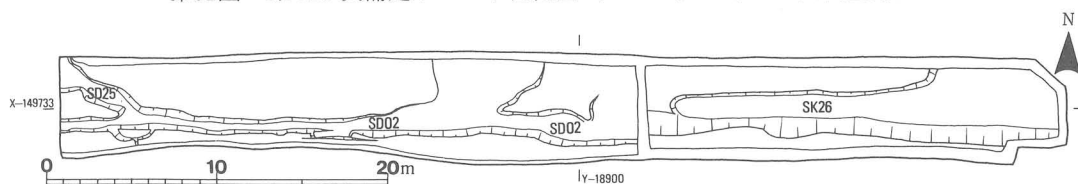
本調査は、1980 年度に実施した県道城廻り線予定地の事前調査（第125次調査 奈良国立文化財研究所編『平城京九条大路―県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ』 1981年3月）を補足するために行なったものである。調査地は、道路敷予定地を東流する一級河川蟹川の移転地で、前回調査時には、遺構面は保存可能と了解されていたが、工法上遺構を損壊せざるを得なくなったため、緊急に調査を実施した。

調査区は前回の第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の間、東西約60mの範囲である。検出した遺構は、平城京右京九条一坊十二坪の南を画する築地塀の南雨落溝と思われる東西溝SD02と発掘区西端部の斜行溝SD25である。SD02は、西半部では幅1m弱、深さ0.3m内外で、第Ⅰ区検出のものにつながる。東半部においては南肩を検出したが、北側は大きく掘りこまれ、土壌状の様相を呈した（SK26）。また、斜行溝SD25の上には焼土・炭化物とともに鋳型の断片と思われる粘土塊が堆積していた。

大量の遺物がSD02およびSD26から出土した。ほとんどが丸・平瓦片で、軒瓦は軒丸瓦6272 型式3点および新出型式のもの1点にすぎない。



第32図 第125次補足トレンチ位置図（Ⅰ～Ⅳ区は第125次調査分）



第33図 第125次補足調査遺構図